ロボット

Sorairo 光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ロボット

【Ｎコード】
Ｎ０８６６Ｋ

【作者名】
Ｓｏｒａｉｒｏ　光

【あらすじ】
少年のロボットへの関心、それを気づかせてくれたのはある一人の少女の存在。
彼女の名前は……。
そしていたずらな運命は二人に何をしたのか。
二人をつなぎとめるものは……。

1・ナナカ

ロボットであるということ、それは環境さえ整えば永遠の命を約束され、感情を持たずに常に最善策への最短ルートを辿るということ。
だから理解できない。
悲しい、痛い、苦しい、辛い、嬉しい、楽しい・・・・・・感情すべて。
人間のすべて。
理解できない。
理解できたらこの機械(カラダ)はエラーを起こし、ショートして使い物にならなくなるだろう。
機械は常に知っている、正しい事、その正しいがゆえの最短ルートも。
でもその思考に人間は付いていけない。
だから理解できない。
機械は人間を・・・・・・その機械を生み出した人間でさえも機械を・・・・・・。
信じる信じない、それは関係ない。
ココにあるのはただ、心を持たない小さな人形とそれを作りだした人間がいるのみ。
最初は簡単な作業しかできない、ただ物事を単純に繰り返す機械だった。
それがいつか、何かを判断するようになり、自分で何をするのかを探せるロボットができた。
体(パーツ)はやがて人間らしくなり、ロボットはパソコンよりも膨大なプログラムを持つものとなった。
プシュゥゥウウ・・・・・・。
「あー・・・・・・チクショウ・・・・・・またかよ・・・・・・。」

今まで何度も言ったその台詞をまた半分あきらめているような声を上げて頭を抱え込む少年の前にあるのは少年によって作られたロボットに繋がっているショートを起こし、壊れかけているパソコン一台。

「イチヤ　言ウ　アレ　パソコン　ダメ。」

小さなロボットが言わんとしている事はそのパソコンは自分よりギガバイトも容量もすべて小さく、自分をプログラムするためにつなぐにはエラーやショートを起こしやすい、ということだ。

イチヤとロボットに呼ばれた少年はもう青年のうっすらひげを生やした顔を上げ、ロボットに言った。

「・・・・・・うるさいな、わかってるよ・・・・・・・でもこれでナナカをプログラミングしてきたんだぞ？このパソコンはいわば、ナナカの心臓なんだ。今更諦められるか！・・・・・・それにナナカはまだ現在進行形と過去形の区別がわかってないし、アレやコレやソレ、ドレ？くらいわかるようにしようと思ったんだよ。」

「イチヤ　理解不能。」

ロボットの声は女の声で、その声にはまだトーク用のロボットとしては感情がなく、平坦で未完成すぎるくらい未完成なモノだったが、イチヤという少年は特にそれを気にせずにロボットに突っ込んだ。その突っ込みはナナカというロボットに理解できないと知っていても。

「俺が理解不能なんじゃなくて俺の言っていることが・・・・・・な？」

するとかすかにコンコンと扉が叩かれる音がしてイチヤは立ち上がり扉の方へと向かった。

1・ナナカ（後書き）

最初が短くてごめんなさい。
次回からはできるだけ長くなるようにがんばります。

2・奈々香

「はい。」
ちなみにナナカというのは彼の・・・・・・イチヤの幼なじみでありライバルであり、片想いの相手である春川（はるかわ）　奈々香（ナナカ）というまんまそれである。
ナナカは彼女に似せて作られており、声も彼女から採取したものを音源にしている。
奈々香という少女はイチヤよりも数段賢く、彼がロボットを作り出したのも彼女の影響だ。
「やぁっほぉっ！壹也（いちや）ぁ！」
そう元気に入ってきたのは・・・・・・奈々香、彼女である。
彼女はこうしてたびたび唐突にイチヤの部屋を訪ねてはナナカの調子を見にくるのだ。
「いきなり来んなよ・・・・・・。」
内心爆発しそうな胸を押さえて冷静にかつ、素っ気なく言った。
「だってさぁ？気になってぇ・・・・・・。」
間抜けそうにテヘッと自分の頭を叩く姿を見ながらイチヤは到底頭よさそうには見えない・・・・・・と毎度の事ながら思い、彼女を部屋へと上げる。
いや、むしろ彼女が部屋へと上がり込んできたといえる。
そんな彼女でもロボットを目の前にするととたんに目付きがかわる。
そんな彼女の才能はイチヤ自信が一番よく理解している。
「ね、壹也、この子の名前はまだ？」
奈々香はナナカを指差しながらイチヤを振り替える。
「ま、まだ！」
少女に少女の名を付けたことを少年はまだ話していない。
「ふぅん・・・・・・壹也、この子どれくらい話せるの？」
「イチヤ　理解不能。」

ナナカはこれで二度目となる理解不能を感情なく言い切った。
「まだまだじゃん！なぁんだ、そろそろ壹也があたし抜かしてても
おかしくないなと思ったのに。」
そういいながら彼女は笑った。
そう、もうとうに抜かした彼女の身長も、ずいぶんと低くなった声
も、彼女の丸みを帯びた体付きも、時は流れた事を告げているのに
少年は少女を追い越せずにいる。
「よく言うよ・・・・・・世界ロボコンで一位のヤツが・・・・・・
。」
少年はいやみをこぼし苦笑した。
少年は世界ロボットコンテストで１６位の結果に終わったが、それ
でも前回の予選敗退よりはかなり伸びたと豪語しているし、彼女も
そのことは良くわかっている。
「なぁんてね、敵観察ってわけじゃないの！にしても・・・・・・
いつもながらに汚い部屋・・・・・・あんたって少年誌とかに出て
くる典型的な男子だよね、私だって足場がなくなるくらい汚くした
ことなんてないのに・・・・・・。」
あきれ気味に腰に手を当て、室内をキョロキョロ見渡す奈々香を見
ながら自分だってどっかのにぶちんで俺の気持ちに気付かないどこ
かの漫画の中の人物じゃないか・・・・・・と心で突っ込んだ少年
を無視し、少女はある場所に駆け寄ると一つの雑誌を拾い上げた。
「わぁ、やだ、やらしー。」
そういいながら嬉しそうに拾いあげたのは・・・・・・エロ本・・・
・・・！
少年は慌てて少女からその雑誌を奪い取った。
この中には少女に似た感じのモデルもいるので彼のお気に入りなの
だ。
でも、そのことはぜったい彼女に知れれてはならない。
「そっかそっか・・・・・・壹也よ、君も男なのだな！ロボット一
筋じゃなくてよかったよ！」

ちなみに先程からイチヤのことを少女は壹也、壹也と連呼しているが、彼の正式名は高倉（たかくら）　壹也（イチヤ）という。
奈々香が少年を壹也と呼ぶからナナカにもイチヤと呼ばせていることは、言うまでもないだろう。
「お前なぁ、人の部屋でエロ本探すのやめろよな！」
強い口調で言うと、奈々香は膨れて、ブーっと言った。
「壹也が起こったぁ・・・・・・・。」
「そりゃ怒るよ・・・・・・普通男の部屋に１人でくるか？」
バリバリと頭をかきながら少女を見下ろす少年、その差なんと２０センチ、ちなみに少年はまだのびる。
これで終わりではない。
すると奈々香は爪先立ちをし、さらに壹也の顔へと近づくので壹也は思わずのけぞく。
「身長で圧倒するな！大体、壹也が私に何かできるとでも思ってるの？私はある意味、君の師匠なのだぞ！」
しゃべり方を一部いつもと変えながら壹也の肩をつつく。
これはあんまりだ、少年は少女に見下されている。
本当は今すぐにだって襲い掛かりたいほど好きなのにその気持ちは奈々香には伝わらず、当然のことながら少年も少女にはまったく手を出せずにこれまで生きてきた。
そしてきっとこれからも。
「イチヤ　理解不能。」
また繰り返すナナカに壹也はかすかなため息を盛らし、命令をした。
「ショートニングプログラム、エンター、終了・・・・・・。」
「終了　プログラム　終了　サレル。」
するとナナカは少しだけ目が点滅し、やがて動かなくなった。

3・雷

ナナカはまだ「終了」の一言だけで終われるような精巧なロボットではない。
しかも受動態も能動態も何もかもがなっていないのだ。
「プ・・・・・・ショートニングプログラム・・・・・・？ショートプログラムでいいじゃん・・・・・！」
クスクスと奈々香は口を軽く手で押さえて笑いだした。
「う、うるせー！ショートはｓｈｏｒｔで短いって意味で、ショートニングはｓｈｏｒｔｅｎｉｎｇで短縮って違いがあるだろっ！」
壹也は慌てふためきながら大声を上げた。
その時、ポツリポツリと雨が降ってきたのを二人は気付かなかった。
壹也の両親はまだ仕事中だ。
ザーザーと雨音が激しくなってからようやく奈々香が気付き、窓に近づくとゆうつそうな声を上げた。
窓は一部、彼女の吐息で白く曇って消える。
「あーあ、振ってきちゃったぁ・・・・・・。」
すると雷の音が聞こえだした。
ゴロゴロ・・・・・・。
「うぉ！？」
声を上げたのは、奈々香ではなく、壹也。
その大きな体を縮めてびくつかせている。
「あんた・・・・・・まだ雷ダメなの・・・・・・・なっさけないなぁ・・・・・・ほら、大丈夫よ。」
そういって奈々香は壹也の隣に腰を下ろすと、壹也の頭をなでではじめた。
「ちょ、俺はもう・・・・・・」
彼女の手を振り払おうとした瞬間、空が光る。
「うわぉっ！」

壹也にはトラウマがある。
彼の両親は小さい頃からよく彼を一人切りにさせた。
そんなある日、雷で家が停電を起こし、何をしたらいいのかわからずに、錯乱に陥った彼は1人でくらい部屋に座り込み、シクシクと泣いていた。
泣くことしかできなかった。
初めて一人でいることがあんなにも・・・・・怖いと思った。
そんな時、「壹也っ！」黄色いカッパを着て、太い蝋燭を片手に扉を勢い良く開いて入ってきたのが少女だった・・・・・。
少女の家は父親がいない。
母親は疲れ切っていつも帰ってくる。
だから少年と同じく一人のはずなのに彼女は一人を恐れずに少年の隣に居続けた。
初めて誰かいることが心強いと思った。
やがて時は過ぎ、少年は奈々香ではないとダメなのだと、自分の胸の高鳴りで知る。
少女は勇ましく育ち、少年はそんな少女に惹かれていく。
でも本当は知っている。
少女は本当は父親も好きな事、会いたいと泣いていたこと、本当は・・・・・弱い事。
少女に憧れながら少年はいつしか、彼女を守りたいと思った。
自分が弱々しい事くらい、わかっていても・・・・・。
なのにこれではあの時と同じだ。
まるっきりかわっちゃいない。
「いいのいいの、無理するなって！“私がしっかりしてなきゃね。”」
奈々香はそういいながら微笑んだが、彼女の口癖はいつも・・・・・・「私がしっかりしてなきゃね。」なのだ。
両親の離婚は自分のせいだと思い込み、余計なことも、欲しいものも我慢して母親は自分のために頑張ってくれているから自分がしっ

かりしてなきゃねと多分無意識に言い聞かせているのだろう。
だからこそ壹也は言ってあげたいのだ。
“もう頑張る必要なんてない”のだと、“気を抜いたっていい”のだと。
少年高鳴る胸と恐怖とで震えながら彼女に言った。
「頑張りすぎてんだよ、お前は・・・・・・。」
「え・・・・・・？」
奈々香の顔にすこし戸惑いや焦りに似た色が浮かんだ瞬間。
ドッカァァァンッ！バリバリバリッ！
物が壊れる音がして、明かりという明かりが消えた。
「キャッ！」
初めて浮かぶ、彼女の少し慌てて、戸惑う表情。
いつもしっかり者の彼女の姿は気を抜いた、少女の奈々香本心の中にはなかった。
ふいにかけられた言葉がかなり驚いたらしいが、次の瞬間にはもとのしっかり者の彼女に戻っていた。
「停電だ・・・・・・蝋燭ある？」
「えっ・・・・・・あぁ、そこに・・・・・・。」
指差した先には壹也のトラウマから買い溜められた蝋燭数本の束が埃を被っていた。
「やだ・・・・・・壹也、これじゃ明かりっていうより肝試しじゃん！」
奈々香は白く太い一本の蝋燭を握り、笑い声をたてた。
正直、奈々香は誰でも男女構わずこんな感じなので壹也の部屋にはよく遊びにくるが、壹也の事をどう思っているのかは不明である。
「う、うるせ・・・・・・。」
空が光る旅に肩をすくめながら壹也は奈々香に言葉をつっかえながら返す。
「ガスコンロ、借りるね。」
そういって手慣れた手つきで蝋燭に火をともし、怯える壹也のそば

に持ってくると、再び壹也のそばに腰を下ろした。

4・倒れた

「はぁ・・・・・・綺麗だなぁ・・・・・・これがカップルなら少しはロマンチックなのに・・・・・・。」
奈々香はチラリと壹也を見ると、また光った空に驚いて壹也は情けない声を上げた。
「うぉっ！ち、近くねぇか！？やけにっ！」
「・・・・・・相手が情けなさすぎる・・・・・・男女真逆ならかっこいいのに・・・・・・。」
奈々香がため息を吐き、ついにプチリときた壹也は少し自虐的なことを言った。
「お前さぁ、俺の事何とも思ってないわりにそーゆー発言、どうかと思うよ。まあ、俺も特にお前のことなんか気にしてないけどな。」
奈々香は少しうつむいてから言った。
「何とも思ってないわけじゃないよ・・・・・・壹也は、私にとって・・・・・・大切な・・・・・・。」
そこまで言って止まる奈々香に戸惑う壹也。
思わず胸が高鳴り、息が浅くなる。
「え・・・・・・？」
「・・・・・・なんだろう・・・・・・弟・・・・・・見たいな、家族・・・・・・みたいな・・・・・・そう、大切な存在なの。」
奈々香はニコリと笑う。
そんな奈々香に「何とも思ってない」と言ったあげく、追い返すこともできず、笑いかけられて、怒ることも、悲しむこともできずに固まった。
「・・・・・・弟・・・・・・ね。」
むなしく空中に発された言葉は泡のように消えていく。
光と音が同時なのを感じながら壹也は身震いをした。
「それより、いきなりパソコン、ショートしちゃったんじゃない？

大丈夫なの？」
奈々香はパソコンに触れた。
「ああ、それは・・・・・・プログラムの設定ですでにショートしてたからな・・・・・・。」
「へぇ、こんなにちっちゃいのに・・・・・・そんな重いの・・・・・・っ！」
奈々香がナナカに触れた瞬間、雷が落ちて奈々香は倒れこんでしまった。
「えっ・・・・・・？ちょ、ウソだろ・・・・・・奈々香？奈々香！」
慌てて少女に触れるが、痛くて触れない。
「・・・・・・何？静電気？」
壹也の頭は錯乱してうまくまわってくれない。
だから感電したということさえ、うまく情報処理が出来なくて静電気？などと間抜けなことを口走っていた。
わかったのはただ、“このまま放っておくのはヤバイ”という危険察知だけ。
でも電化製品は停電を起こして、使い物にならない。
少年は部屋を跳びだし、雨の中を走った。
多分パートを済ませたおばさんならいるだろうと壹也の思考は働いたのだ。
怖い雷も、近い音も、眩しい光さえも気にせず、ただ少女が危ない！その一心で走った。
奈々香の家は壹也の家と近いからすぐにたどり着き、扉を勢い良く叩く。
ただただ必死に無我夢中になって、いてくれ、いてくれ、と願いながら。
「はい・・・・・・。」
疲れ切った顔のおばさんが壹也を出迎えてくれたが、壹也の姿を見てギョッとしてから、「どうしたの？」と言ってくれた。

どうやら“普通”じゃないことだけは理解してくれたらしい。
部屋は外より暗い。
どうやらここらの地域一帯がこんな感じらしい。
「な・・・・・・なか・・・・・・・奈々香がっ・・・・・・・・俺の・・・・・・俺のっ！部屋で・・・・・・・倒れてっ！」

5・責任逃れ

焦りすぎて自分で何を言っているのか理解できずにいると、おばさんは顔色を変え、壹也の部屋に奈々香がいることを確認すると携帯を取出し、１１９に電話をかけた。
そう、壹也は携帯があることさえ頭が回らずにいた。
きっと奈々香の母親が家にいなかったら壹也は病院にだって走っていっただろう。
救急車が到着した頃には奈々香はピクリとも動かなくなって、このままだと九死に一生。
その一生で助かっても、脳生涯がでるだろうと言われた。
気が付いたら祈るような形で椅子に座り込んでいた。
気が付いたら病院の待合室にいた。
どこの病院だかわからない。
壹也は急に寒さを感じて身震いした。
壹也の体はびっしょりと濡れて、冷えきっていた。
それさえも気付かずにいた。
ただ、奈々香が無事であることだけを祈った。
おばさんが蒼白な顔色でふらふらとやってきた。
「奈々香は・・・・・・。」
顔を上げた瞬間に口を接ぐんだ。
ダメだったのだと・・・奈々香は死んだのだとその表情から壹也は読み取ったのだ。
その顔に感情がなければ血の色さえ失せている。
するとおばさんがちらりと壹也を見てから疲れ切ったように笑った。
「あ・・・・・・ああ、壹也君・・・・・・奈々香はね・・・・・・平気よ。」
壹也は驚いた。
ならばなぜ、そんな顔をするのか。

尋ねたかったがそこはこらえ、口をつぐむ。
「ただ・・・・・ただね、奈々香の意識が戻らないの・・・・・・・。」
勝手に話しはじめた彼女は壹也を無視して話を進めていく。
「最近はもう母子手当てもないに等しいし、旦那からの育児金もこなくなった。このままだと・・・・・・奈々香はしばらくして意識が戻らなければ死んでしまう。そうならないためには病院につなぎ止めておかなきゃ・・・・・・ああでも、二人の生活だけでもいっぱいいっぱいなのよ？どこからそんなお金・・・・・・。」
彼女は自分に言い聞かせるようにしゃがみこむと、うなるようなむせるような声を上げ、泣きだした。
「どうすれば・・・・・どうすればいいのよぅ・・・・・・・。」
ひどく頼りない彼女の姿を見て奈々香が気の毒になった。
気が弱くて愚痴ばかり吐き出すマイナス思考の母親。
普通なら家を飛び出すだろう。
嫌になって逃げ出すだろう。
でも奈々香はそうしなかった。
優しい彼女は自分がしっかりしなきゃと言い聞かせて、自分が脆くなっていたのだ。
そんな自分を保つために何度も何度も壹也の部屋を訪ねて来たのかもしれない。
本当はもっと早くから求められていたのかもしれない。
「ありのままでいい」と言われるときを。
望んでいたのかもしれない。
「いやだ・・・・・・。」
壹也は微かにそう言った。
それから自分にできる精一杯の声で言葉を紡いだ。
視界がぼやけて見えなくなってきた。
鼻もつまって息がしずらい。
それでも紡いだ。

自分の精一杯の気持ちを・・・・・・・。
「いやだ・・・・・いやだ・・・・・・・死ぬな！戻ってこい！奈々香！」
何度だって伝えてやる。
何度だって言ってやる。
ありのままでいいと、頑張りすぎなくていいと、何度だって何度だって言ってやる。
だから・・・・・・。
「戻ってこい・・・・・・・奈々香・・・・・・・！」
最後は泣き声に震え、擦れて言葉ではなかった。
発されたのはただの音・・・・・・言葉単体では理解できないただの・・・・・・音。
だんだんむせて苦しくなった。
生きている。
ただそれだけが頼りで、二人は泣き続けた。
疲れてお互いに無心になるまで。
しばらくして壹也はぼんやりとつぶやいた。
「・・・・・・ごめん・・・・・・なさい。奈々香がああなったのって俺のせい・・・・・・ですよね。」
俺が、頼りなかったから・・・・・そう付け加えようとして、無駄口だと思い、そのまま口をつぐんだ。
思い直したのだ。
自分が頼りないから？そんなこと言ってどうする？
俺は彼女の彼氏じゃないんだぞ。
だいたい、あの状況で俺が別の性格の人物だとしても、何かできたのかよ？・・・・・・と。ならいっそ下手な言い訳などしないで罵られようと思った。
でもどこかで、彼女(このひと)の母親だって頼りない点でも自分を攻められないだろうと思った。
思っていた。

だから怒られもしないだろうと・・・・・・。

6・ナナカと奈々香

見下していたのだ。
奈々香に負担ばかりかける彼女(このひと)が少しだけ許せなかった。
親なら気付よ、といつもどこかで悪態をついていた。
言ってしまえば責任逃れができて、自分は楽になる。
でも、言ってしまえば彼女は窮地に立たされ、下手したら自殺をはかるだろう。
そうしたら奈々香はどうする？
目が覚めたときに母親がいなかったら、彼女は自由と少々の解放感を得た代わりに崩れ落ちてしまうだろう。
だから奈々香のためを考えてこれ以上この人を刺激しないようにしよう。
とぼんやりと隣でまだ涙を流している奈々香の母親を眺めていた。
それから幾日かが過ぎ、ついに脳死状態にあると聞かされた。
ナナカもあの頃のまま電源を入れられずにいた。
もしこのまま意識が戻っても体は正常にはもどらない。
奈々香の母親の体力も限界まで来ていた。
この前、過労でぶっ倒れたらしい。
これ以上奈々香を入院させることはできないだろう。
きっと入院させておくために必死に掻き集めたお金がすぐに消えたのだから。
奈々香の生死を決めるのは彼女だ。
俺ではない。
だから久々にナナカにスイッチを入れよう。
異常があるかもしれない。
そう思いたち、ナナカに電源を入れると、その目は見開かれ、プログラムされていない言葉を発した。
「アレ・・・・・・イチヤ・・・・・・アタシ　ナニ　シテタノ・・・

・・・・・？」
ナナカの声でも、言葉の使い回しが完璧な事、またプログラムしていない仕草をナナカがしていることにすごく驚いて壹也はナナカをまじまじと見た。
「ナナカ？」
「ソウダケド・・・・・・体ガ　重イ　言葉　モ　遅イ　ナンカ・・・・・・全部　ガ　変・・・・・・・。」
その瞬間壹也はナナカではなく、ナナカの中に奈々香がいるのだと気付いた。
「奈々香！？」
そのとたん、プツンという小さな音がして、いつもの聞き慣れた声が聞こえた。
「イチヤ　プログラム　二　バク　発生　削除開始　サレル？」
「削除するな！ノーだ！ノー！」
するとナナカは目を少しだけ点灯させると言った。
「未知　ノ　バク　現在移動中　今スグ　削除開始　プログラム書キ換エ　サレタ　コノ　ママ　ＮＡＮＡＫＡ．Ｐｒｏｇｒａｍ実行不可能。」
ナナカが言おうとしているのは自分のプログラム内に今まで存在しなかった自分で行動するバクが現れたということ。
しかもそのバクはナナカの設定をどんどん今も変えているらしく、このままではナナカに設定してあったＮＡＮＡＫＡ．Ｐｒｏｇｒａｍというファイルまで書き換えかれて、ナナカ自体が代わり、ＮＡＮＡＫＡ．Ｐｒｏｇｒａｍが実行できなくなるということだ。
でもそのバクというのはナナカの中にいる奈々香本人の意思・・・・・・。
壹也は無我夢中でナナカに命じた。
「構わない！消すな！ノー！」
「了解　サレタ。」
その瞬間、また目が点滅のようになると、奈々香が現れた。

「アレ？　アタシ　何　ガ　起コッテ・・・・・・ソレヨリ　ドウシテ　アタシ　コノ子　ノ　中　二　イルノ？」
どうやら頭の回転がいい奈々香はすでに体が自分の物ではなくナナカの中にいると気付いたらしい。
「ア、ア、ア、アァァァァァァァァ～♪」
壹也が困っていると奈々香はいきなり声をあげた。
しかも音量がまちまちなために非常にうるさい。
「う、うるせー！奈々香！何やってんだよお前！」
「ダッテ　音　ガ　小サカッタ　カラ・・・プログラム　書キ換エシタカラネ。」
確かに音は聞きやすい音になったが発音はまだまだだ。
「ム　ム・・・・・・マダ　単語　ト　単語　ノ　間　ガ　長スギ・・・・・・！」
「というか、あんまりいじくんなよ。壊れるかもしれないだろ。」
するとしばらくの間が開いたのちに彼女は言った。
「コレデヨシ！」
それは彼女の声そのもので、感情まで入っている。
どうやらイントネーションも変えて、間も変えたらしい。
声は元々彼女に採取を頼んだものだ。
彼女の声以外になるわけないが、イントネーションがあると彼女が本当にそこにいるようだった。
「大体サァ、プログラムファイルガ重イ！アリエナイ！アタシ、コノ子ノ中二イルノニアタシガイジクルノモ大変ナンテ、重スギデショ！」

7・プログラム

何事もなかったように壹也を説教する姿は相変わらずだった。
「どこにいても変わらねーなぁ・・・・・・じゃなくて！お前！なんでそこにいるんだよ！」
「エ・・・・・・多分アタシガコノ子二触ッタトキ二ナンカオカシクナッタ・・・・・カラジャナイ？」
プログラムをどんどんいじっているらしくそうしている間にもだんだんナナカに仕草がつき、言葉もスムーズになる。
「なった・・・・・・からじゃない？じゃ、ねーよ！今お前の体は衰弱してる！お母さんだってお前を入院させておくために頑張ってぶっ倒れたらしいし、このままじゃ・・・・・・点滴だけじゃ、生命維持はできないらしい・・・・・・俺の連絡が遅かったこともあってお前・・・・・・意識が戻っても脳傷害が起きるかもしれねーって。」
「フゥン・・・・・・。」
「フゥンじゃねーだろ！」
「オ母サンハ？平気ナノ？」
どうして彼女は自分の心配をしないのだろう。
どうして自分より先に他人を心配するのだろう。
壹也は複雑そうな表情を浮かべてから言った。
「大丈夫だよ。ちゃんと安静にしてれば・・・でもそれは同時にお前の危機なんだぞ！？わかってんのかよ！？」
「アタシネ・・・・・・人二頼リニサレルノガ好キミタイ・・・・・・ダカラ・・・・・・自分ヨリ周リヲ気ニシチャウミタイ・・・・・・ダカラカナ？イチヤニハイツモアタシノ心配サセテバッカリデ・・・・・ソンナイチヤダカラアタシモ生キテルッテ・・・・・・誰カニ・・・・・・マダ必要トサレテルッテ思ッタ。アタシ、イチヤトイル時間ガ一番好キ・・・・・・デモ、ゴメンネ。アタシノ心

配バカリサセテ。」
ナナカは感情が顔に出ないが、その声はまるで少し寂しそうに笑っているようだった。
その声を聞きながら壹也は奈々香の笑顔が無性に恋しくなった。
「バカ・・・・・・お前、バカだよ。何言ってんだよ！もう誰の心配もしなくていいんだ！お前はお前のままでいいんだよ！もう、自分の心配してればいいんだよ・・・・・・！」
「優しいネ・・・・・・壹也・・・・・・。」
驚いて壹也は奈々香を見た。
「アリガトウ・・・・・・。」
さっきの声があまりにも奈々香そのものだったのだ。
もう機械音ではない。
壹也は思わず泣きそうな顔で笑った。
「お前・・・・・・どれだけプログラムいじってんだよ・・・・・・。」
「ダッテ・・・・・・話しヅライから・・・・・・デモ、ヨカッタ・・・・・・壹也、笑ってクレテ。」
壹也は言葉に詰まってしまった。
“また”彼女に気を遣わせたこと。
その優しさの裏の辛さを壹也は知っている。
だからこそ彼女を守と決めて、守れずにいる自分を・・・・・・守られている自分を好きになれずにいる。
小さく唇を噛み締めて、体が震えた。
「無理・・・・・・すんなよ。お前はお前でいいんだからな。」
そういってパソコンを立ち上げようとパソコンの椅子に腰掛けたとたん、クスリと笑い声が聞こえた。
「クサイぃ。」
壹也自信はクサイ台詞を言ったつもりはなかったので目を点にしたが、ああ、そうか、クサイのか・・・・・・と後ろ頭をかいた。
「デモ、アリガトウね・・・・・・壹也。」

優しげな彼女の声に壹也は一瞬錯覚に陥った。
ずっと奈々香がこのまま自分のそばにいてくれるような気がしたのだ。
彼女は肉体を持たない。
心だけがナナカの中にある。
それは時に残酷で、時に優しすぎる甘い夢のようだった。
消えなければいい・・・・・・このままずっと・・・・・・。
だけど彼女の肉体が滅びれば彼女は世間的には死んだことになる。
この表情のないナナカの中であの懐かしい笑顔を見ることも、呆れた顔も、泣き顔も、彼女の涙さえ見ることはできなくなる。
「奈々香。」
ふいに彼女の名前を呼んだ。
「何？」
「一時停止に・・・・・・なってくれないか？たしかお前の思考もスリープモードになるだろ？」
「いいケド・・・・・・どうシて？」
「後で話すよ。」
「わかッタ。」
敬語を標準語としてプログラムしてあるナナカは奈々香のしゃべるタメ語にはまだまだ対応していけないらしい。
いくら中に入っている人物が天才メカ技術者でもやはり困難なことは困難なままらしいのだ。
ナナカの目は点滅し、やがて淡い緑色へと変わった。
「俺・・・・・・どうすればいいか、わかんないよ・・・・・・奈々香・・・・・・。」
そう小さく泣き言をもらし、ナナカの額と思われるところに小さく口を寄せた。
彼女に消えてほしくない存在はきっと俺だけじゃない。
でも、彼女が仮に元の肉体に戻ることができたとして、いつも通りの笑顔が見れるのかさえわからない。

何より自分のそばにいてほしい。
今や彼女の幼なじみとして定着してしまった自分は恋愛対象としては見てもらえないだろう。
それを裏付けるように彼女は自分の言葉に激しい喜怒哀楽を示すことはない。
それに昔、彼氏ができたと何度か聞いた。
その彼氏は自分とはタイプが真逆だった。
素直で優しく、愛想のいい彼女の性格とよく似た感じの優男・・・・・・・。
俺はそんな優男にはなれない。
ぶっきらぼうで不器用なまんまだ。
だからこそ彼女みたいな優女に惹かれるのかもしれないけど・・・・・・どうせ戻っても関係が変わらないなら。
このまま二人きりの秘密でいたい。
でもあの母親は娘を亡くしたら気をおかしくするかもしれない。
娘を追って自殺をはかろうとするかもしれない。
彼女の自虐的性格からしたらあり得ない話じゃない。
常に情緒不安定だし・・・・・・。
今度はそれを知った奈々香だ。
きっと奈々香は奈々香ではなくなってしまう。
人格が崩壊してしまうだろう。
でもナナカの中に奈々香がいるとあの母親に伝えたら・・・・・・
今度はどうなる？
奈々香をなんとか戻そうともしかしたらナナカを分解し始めるかもしれない。
笑い話であってほしいが、本当にやりかねないこの恐怖はきっと雷よりも勝るだろう。
もしナナカを分解されたら今度こそ奈々香はいなくなるだろう。
彼女が作り上げたＮｅｗ　ＮＡＮＡＫＡ．Ｐｒｏｇｒａｍはパソコンのプログラムデータにはない。

これと同じ代物は同じ部品を使っても作れはしないのだ。
パソコンだって立ち上げてみたはいいが、画面がすでに大量のエラーをしめしている。
この基本ベースとなるプログラムさえも消えたらやはり・・・・・・・
ナナカも奈々香も消滅してしまうだろう・・・・・・。
それならいっそ、二人でいたい。
奈々香に生きていてほしい。
壹也の葛藤は続き、答えを出せずに頭の中で堂々巡りをした。

8・時間

「ソッカ！ソーダヨネ！アハハ！」
乾いた笑い声に聞こえて仕方なかった。
からからと、肉体のない機会(からだ)はあるべき音を出すだけだった。
「もし、俺がさ・・・・・・お前の事、好きだって言ったら・・・・・・どうかしたわけ？」
希望を捨て切れずに哀れに声は部屋に響く。
「・・・・・・あぁ、そーなんだなーッテ・・・・・・ゴメン・・・・・・あたし、最低ダヨネ・・・・・・でも、自分が必要トサレテイルト思うト、すごく・・・・・・嬉しくテ・・・・・・中途半端ナ気持ちナンカデ聞いて・・・・・・ゴメン。」
その答えに期待した自分がバカみたいに思えた。
つまり、奈々香は自分に興味を示してくれる人に少し興味があるだけ。
特定の人物に興味があるわけではないのだ。
「・・・・・・いいよ、別に。それよりお母さんに会いたいんだろ？行くぞ。」
ナナカとパソコンを繋いでいたプログラムを取ると彼女の母親の元へと急いだ。
出迎えてくれた彼女は“骸骨”と呼ぶにふさわしい格好をしていて、今にも倒れそうだった。
青白い、血の気のない肌。
痩せこけた体や頬、目の周りは落ちくぼみ、目がギョロリと飛び出しそうになっている。
恐らく誰もが真夜中、光のあまりない路地で彼女と出会おうものなら即座に叫んで逃げ出すだろう。
「あら、壹也君・・・・・・いらっしゃい。」
「急に来てすみません、おばさんがまだ本調子じゃない事もわかっ

てます。でも、俺を家にあげてもらえませんか？」
彼女は骨で動いているような腕をあげ、どうぞと壹也を家へと招いた。
壹也はそこで一連のことを話し、奈々香にも話をさせたが、奈々香は言葉が詰まってしまったらしくなかなか会話が進まない。
「・・・・・・俺もつい最近この事を知ったので、連絡が遅くなってしまってすみませんでした。」
「・・・・・・そんな、漫画やどこかの物語みたいな事・・・・・・。」
「俺も最近は信じられませんでしたが、現実に奈々香の魂はこの中にあるんです。」
「心配・・・・・・カケテごめんなさい・・・・・・・お母さん。」
奈々香がひたすらにあやまる。
どうやらまた背負いこんでしまったらしい。
“自分のせいで”こうなったのだと。
「・・・・・・奈々香・・・・・・いるのね？奈々香・・・・・・！それで・・・・・・奈々香の魂はどうやったら取り出せるの？奈々香の体にはもう時間がないのよ！」
「わかりません。俺にもどうしてこうなったのかわからないんです。」
「そう・・・・・・ちょっとまっててもらえるかしら。」
いやな予感と共に、戻ってきた彼女の手に握られていたものは・・・・・・ドライバー。
嫌な予感は当たった・・・・・・。
「ちょっ！止めてください！落ち着いてください！」
壹也が必死に阻止する。
「どうしてよ！機械に取りついてるんでしょ！？そしたらその機械（からだ）を失えば奈々香は・・・・・・奈々香は元に戻るかもしれないじゃない！」
「落ち着いてください！これを壊したってもし奈々香が戻らなかっ

たら同じ事ですよ！とりあえずここにいれば彼女は生きているんですから、もう少し様子を見なきゃわからないことだらけですよ！」
押さえ付けられた母親はしゃがみこみ、啜り泣いた。
これが、子どもに依存しながら生きてきたあわれな母親の姿なのかとその母親のつむじを見下ろしながら考えていた。
「もう、もう・・・・・・奈々香の体には時間が残されていないのよ・・・・・・！」
子どもに負担を掛け続けた責を今、すべて背負った母親がいる。
気付くのが遅すぎたのだろう、子どもが失われる直前・・・・・・
それも自分が情緒不安定、過労になってからやっと子どもにどれだけ依存していたかを気付きはじめているあわれな母親。
彼女を救える人はどこにもいない。
ただ一人、奈々香をのぞいて。
「俺はこれで失礼します。あの、奈々香を充電するんで、奈々香に会いたいときは俺の家に尋ねてきてくれればいつでもいますんで・・・・・・。」
ナナカを引っ掴むと逃げるようにその場を去った。
部屋に逃げ込むように入ると、扉の前でしゃがみこんだ。
息が、荒れている。
「壹也、あたしまだ充電する必要ナイヨ・・・・・・？」
わかっている。
それでも、あそこにナナカを置いておくのは危険だと思った。
怖いと思った。
あの母親ならナナカを分解しかねない。
もし奈々香が自分のそばからいきなりいなくなったらどうしようかと、ただそれだけだった。

8・時間（後書き）

ヘタレ&男の子視点を書きたかったのですが、全然ダメダメですね。
多分次回が最終話になると思います。
読んでくださった読者の皆様、ありがとうございます。

9・二度目

「いいんだよ。いいんだ。何も気にするな。」
「でも・・・・・・お母さん・・・・・・アンナニ痩せコケタ姿シテタ・・・・・・あれ、あたしのせい・・・ダヨネ・・・。」
「おまえのせいじゃねーよ。何でもかんでも背負うのやめれば？」
少し呆れたようにナナカとパソコンのコードやプラグをつなぎなおしてからパソコンの前で肘をついた。
「何・・・・・・それ・・・・・・ムカツク・・・・・・壹也のクセニ・・・・・・コンナノ、いつもの壹也ジャナイ！」
「はあ？」
余りにも突拍子もない言葉が出てきたため、壹也はずるりとこけそうになった。
「壹也は・・・・・・いつも優しクテ、いつもヘタレデ・・・・・・あたしにコンナ厳しい事言う人ナンカジャナイ！」
「厳しい事なんか何も・・・・・・ただ、俺は・・・・・・お前が何でもかんでも背負うのは荷が重すぎるんじゃないかと思っただけだよ。」
少し困り顔になって壹也は奈々香を説得しようとするが、奈々香はこちらを向いてくれない。
ロボットの顔を必死に動かして壹也から顔を背けていた。
「・・・・・・今、壹也ガ・・・・・・あたしの知らナイ男の人ミタイデ・・・・・・恐い・・・・・・初めて、壹也を怖いト思ッタ・・・・・・あたし達の時間は変わらないト思ッテタケド、いつからコンナニ差ガデキチャッテタンダロウ・・・・・・」
なにかぶつぶつ呟く奈々香の声も口の動きがないと全く聞き取れない。
「え？何だよ？それにヘタレって・・・・・・。」
壹也は自分の事をどちらかといえば、だが、ツンデレ系だと思って

いたが、奈々香から見た壹也はヘタレ系だったらしい。
女子になかなかアタックのできない典型的な草食系男子ってことか・・・・・・と後ろ頭をかいた。
思い返せばいつも奈々香に守られている自分がいるのを思い出してため息を吐くと、パソコンの電源を入れた。
パソコンはエラーしたのかエラー画面がやたらと長く出てくる。
「ッ！！壹也！電源切ッテ！パソコンの電源、早く！！」
ナナカの様子がおかしかった。
ロボットなのに痙攣をしているみたいだ。
慌ててパソコンの電源を落とすと、それも止まった。
「奈々香！？奈々香、おい、大丈夫かよ！！」
「ン・・・・・・何トカ・・・・・・。」
「何が起きたんだ？」
「解らない・・・・・・デモ、ナンカいきなり意識が飛ばされて・・・・・・削除されテクミタイダッタ・・・・・・。」
「大丈夫・・・・・・なんだよな？」
「あたし・・・・・・はネ。それより、あなた・・・・・・誰？」
奈々香の質問に戸惑う壹也。
「何、言ってんだよ？壹也だろ？俺の名前も忘れたのかよ？」
ナナカは頭を振った。
「あたしの知ってル壹也は、ヘタレデ、無愛想ダモン・・・・・・
今、ココニイル壹也は、ヘタレでも、無愛想デモナイ・・・・・・
その顔は、ナナカちゃんニシカ見せないノ？あたしは、壹也の事、知ってルつもりデ知らないノ？」
壹也はすべてを決心した。
覚悟せざるを得なかった。
奈々香の思わせ振りな態度に何もできない悔しさと、何も知らないくせにという奈々香への憎しみとがあふれ出てきてしまったからだ。
引かれても仕方ない。
このままの関係が続くほうが、半殺しみたいな生活が続く方が、嫌

だと初めて思ったのだ。
「いい加減にしろよ・・・・・・そーゆー思わせ振りな態度とか、発言とか全部！なんなんだよ！？俺の全てを知っているって！？何がだよ！」
「・・・・・・！？壹也！？」
「そうだよ！俺はお前が好きだよ！それ言ったからって俺がおまえの彼氏になれるわけでもねーだろ！なのにお前は俺を惑わせて、楽しいか！？だいたい何で男の部屋に１人でくるんだよ！？バカじゃねーの！？自分が女だって自覚ねーんじゃねーの！？」
「壹也・・・・・・怖い・・・・・・！」
言いたかったことを一気にぶちまけた壹也は、ナナカから顔を背けて呟いた。
「わかったら、これ以上俺に期待なんてさせんな。虚しくなるだけだから・・・・・・。」
「ゴメン・・・・・・ヤッパリ、気分悪いヨネ・・・・・・中途半端な気持ちデ・・・・・・本心キカレルナンテ・・・・・・あたし、ついつい試してタ・・・・・・壹也があたしヲ必要としてクレル事・・・・・・凄く嬉しかったカラ・・・・・・。デ、デモネ？あたし、壹也ノ事、困らせようトしてたワケジャナイノ・・・・・・壹也の事・・・・・・男として・・・・・・異性として見なかったワケジャナイ。」
壹也は、何が言いたいのかわからない奈々香を見た。
「奈々香？」
次の瞬間、何が起こったのか理解できなかった。
ナナカは倒れていた。
「奈々香！！」
「プログラム　エラー　プログラム　エラー　ＮＡＮＡＫＡ．Ｐｒｏｇｒａｍ@Ｎｅｗ｜ＮＡＮＡＫＡ．Ｐｒｏｇｒａｍ－ｎｖｐｊ@ａｎｎ／ｖ｜ｂｉｂａｓｉｐｈｖｍｗ：　ハ　実行不可能デス　新シク　プログラム　ヲ　インストール　スルカ　打ち直し　ヲ　シ

テクダサイ　コノ　プログラム　ハ　後　１０秒　デ　破損　シマス　現在使ワレテイル　予備用　ＮＡＮＡＫＡ．Ｐｒｏｇｒａｍ－ｎｅｎｅ　モ　後　約　２０秒程　デ　使用不可能　ト　ナリマス
コノ　プログラム　ガ　破損　シタ　場合　機械本体名　ナナカ　ニ　支障　ガ　出ル　可能性　ガ　含マレテイマス。」
目を赤く点滅しながらかなり危ないジジッという音をたてているナナカを持ち上げてどうしていいかわからない壹也はたた呆然と奈々香というコントローラーを失って壊れ行くことしかできない機械を眺めていた。
それしかもう今の壹也にはできなかった。
プログラムを初期化すればナナカは助かるだろう。
でも、奈々香はどうなる？
「・・・・・・5・・・・・・4・・・・・・」
嫌でも壹也の耳に強制終了のカウントダウンが入ってくる。
「3・・・・・・2・・・・・・1・・・・・・強制終了開始　シマス。」
ブブブ・・・・・・ブン・・・・・・。
そしてそれっきりナナカは動かなくなった。
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」
壹也は叫んだ。
ただひたすらに叫んだ。
叫ぶしかできなかった。
これで二度目となる。
“また”自分の目の前から奈々香を失ったのである。
「ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
そのうち親が駆けつけて押さえつけ、壹也自身が壊れるまでその叫び声は続いた。
「壹也！周りの人たちのご迷惑になるでしょ！母さんのところまで息子がうるさいって電話があったのよ！何度もかかってくるから母さん、今日は仕事切り上げてきちゃったんだからね！わかってるの

！？」
壹也は何も答えなかった。
普段何をしていてもこんなに早くは帰ってこない両親がだ。
こんなに早くに自分を押さえつけるためだけに帰ってきた。
「壹也、何があった？父さんに話してみろ。」
話したって信じやしないだろう。
大体二人してこういう時だけ親ぶらないでほしい。
いつも俺が何をしてても無関心だったじゃないか。
壹也はベッドに横たわって、「ごめん。オトウサン、オカアサン。」
とだけ言った。
二人はため息をついて部屋から出て行った。
しばらくして電話が入った。
それには壹也の母が電話に出たが、後に呼ばれた。
「奈々香ちゃんの容態が急変して危ないんですって！」
今更植物人間が？
でも、もしかしたら・・・・・・いやだ。
逝くな、奈々香！！
その一身で壹也は何も持たずに走り出した。
途中母親とぶつかった。
「きゃ！」と言われた。
それでも振り返らずに走り続けた。
病院に駆け込んだ時、奈々香は薄目を開けていた。
意識は戻ったらしい。
でも、奈々香の母親は泣いている。
生きているのに・・・・・・ナゼ？
ああ、きっと嬉し泣きなんだ。
「壹也・・・・・・君・・・・・・。」
「おばさん・・・・・・奈々香は・・・・・・奈々香は無事なんでしょ？」
「ええ、一応ね・・・・・・でも、何も聞こえていないし、見えて

いないらしいわ・・・・・・。」
「でも・・・・・・生きてたんだから、いいじゃないですか・・・・・・なぁ、奈々香。」
奈々香の手を握った。
すると奈々香は壹也の手を握り返した。
「い・・・・・・ち・・・・・・・や？」
呼ばれた自分の名前に驚く。
「そうだよ、俺だよ！わかるか！？奈々香！」
強く手を握り返した。
「みぇない・・・・・・きごえない・・・・・・。」
発音が少しおかしくなっている。
さっきの“ち”も限りなく“てぃ”に近かった。
それでもかまわなかった。
「生きてて、よかった・・・・・・。」
大胆にも壹也は奈々香を抱きしめ、奈々香もそれに答えた。
奈々香は視力も聴力も失ったが元気になった。
それだけで壹也には十分だった。
「いーちやーどこぉ？」
「後ろ。」
肩に置いた手を伝って、奈々香は壹也の顔に触れて言った。
「見つけたー・・・・・・老けたねぇ、お互いにぃ。」
子供のようにそう言って奈々香はへにゃっと笑った。
もう、あの事件から数年が経過していた――……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0866k/

ロボット

2010年10月28日07時30分発行